研 究 者：鈴木　　瞳
（所属：東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔健康教育学分野）

研究題目：多職種連携実践に向けた歯科衛生士の認識・能力の客観的評価と実践への課題の検討

目　的：

近年、病院や介護の現場にて、多職種連携を実践できる歯科衛生士が求められているものの、教育機会は限定的であり、卒前・卒後とも多職種連携教育に関する評価指標を用いて、教育効果を検証した報告はない。そこで、本研究では、卒前の歯科衛生学生を対象に、多職種連携教育に対する尺度を用いて歯科衛生士における連携教育効果を調べ、評価尺度の有用性の検証ならびに実践力を高める教育、研修手法を検討することを目的とする。

対象および方法：

【対象】

2023 年度東京医科歯科大学歯学部口腔保健衛生学専攻学生（以下 OHS）４年 18 名のうち、同大学看護学専攻学生（以下 NS）との口腔ケアに関する連携授業を受講した者を対象とした。

【方法】

2023 年５月、OHS と NS ２年生 55 名との連携授業を実施した。授業は、小グループに分かれて、OHS が NS へ口腔ケアに関する健康教育と実技指導を行い、さらにグループディスカッションのファシリテーターを担う等、実際の職種間連携に近い形式とした。

授業の前後２回に渡り、OHS を対象に Web 調査を実施した。調査項目には、授業の到達目標の達成度の他、多職種連携教育に関連する下記の尺度を含めた。

- RIPLS（Readiness of health care students for Interprofessional Learning Scale）：多職種連携教育に対する準備性や態度を測る尺度。19 項目、５件法（５．強くそう思う～１．全くそう思わない）で回答を得る。
  下位項目として、チームワークとコラボレーション（13 項目）、IPE の機会（２項目）、専門性：非独善的態度（４項目）の３つに分類される。
- IEPS（Interdisciplinary Education Perception Scale）：多職種連携教育への認識を測る尺度。18 項目、６件法（６．強く同意する～１．強く否定する）で回答を得る。
- Kiss-18：社会的スキルの評価尺度。18 項目、回答は５件法（５．いつもそうだ～１．いつもそうでない）。

連携授業前後の各指標の結果を、Wilcoxon の符号付順位和検定を用いて比較し、歯科衛生士学生における多職種連携教育への準備性や態度、認識、多職種連携に必要となる社会的スキルの現状を客観的に評価するとともに、連携機会がもたらす効果を検証した。統計解析には、SPSS®（Ver.29.0 IBM、東京）を使用し、有意水準は５％とした。なお、本研究は、本学統合

教育機構倫理審査委員会の承認を得て、実施した。（受付番号 C2022-011）

結果および考察：

15 名より回答が得られ、回収率は 83.3%であった。

１．到達目標に対する達成度の自己評価の変化

授業における到達目標の達成度を、図１に示す。「要介護高齢者における口腔機能の特徴の説明」「対象者の理解に合わせた適切な情報提供、健康教育の実践」等の４項目において、授業終了後に「できる」と回答する者が有意に増加した。その他、ほぼ全ての項目において有意差は認めないものの、肯定的回答の割合が増加した。本結果より、他学科下級生への屋根瓦形式の授業が、OHS 自身の知識理解を深めるとともに、健康教育の実践、連携実践への自信に繋がったと示唆された。

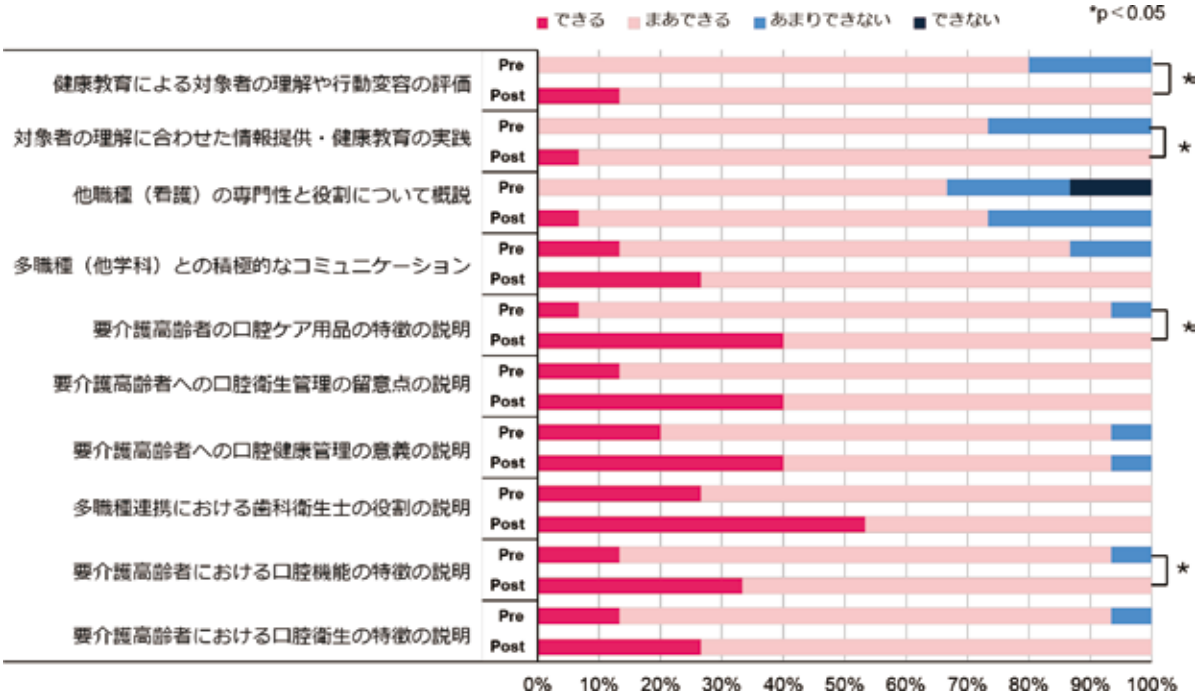

図１　到達目標の達成度の変化

２．多職種連携教育に関連する尺度

多職種連携教育への準備性と態度を評価する RIPLS 合計点の中央値（四分位）は、授業前 82（73、87）から、授業後 87（75、88）と有意に増加した（P＝0.034）（図２）。

RIPLS の下位項目の結果を図３に示す。「チームワークとコラボレーション」の合計点は、授業後有意に上昇し、連携授業による交流を通し、協働への意識を向上させたと考えられた。「IPE の機会」「専門性」は、授業前から高値を示しており、授業前後で有意な変化を認めなかった。本学は、医療系総合大学であり、早期から連携教育の機会が多いことが「IPE の機会」の授業前からの評価の高さに影響していると推察された。

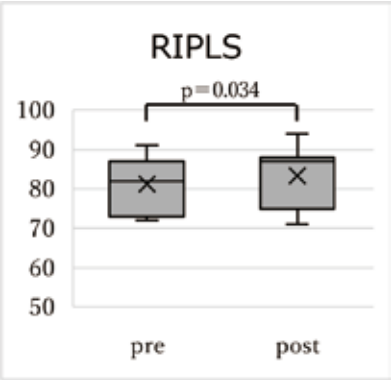

図２　RIPLS 合計の変化

図３　RIPLS 下位項目の授業前後における変化

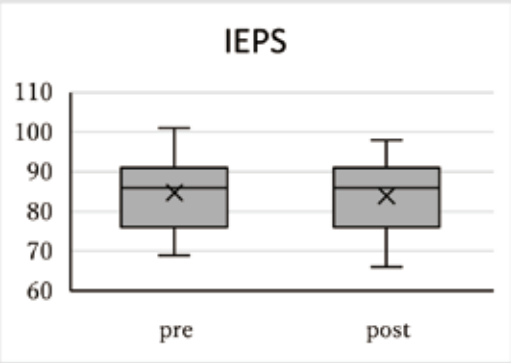

図４　IEPS の授業前後の変化

多職種連携教育への認識を評価する IEPS は、授業前後で有意な変化を認めなかった（図４）。

各項目の結果では、「私と同じ専門職種の人々は自律的に行動できる」「私と同じ専門職種の人々は他の専門職種の人々と緊密に連携できる」「私と同じ専門職種の人々は充分な教育を受けている」等の項目は、授業後に肯定的回答の割合が増加した。本結果より、今回の連携機会を通して、自職種の自律性や連携能力についての認識が高まったことが示された。

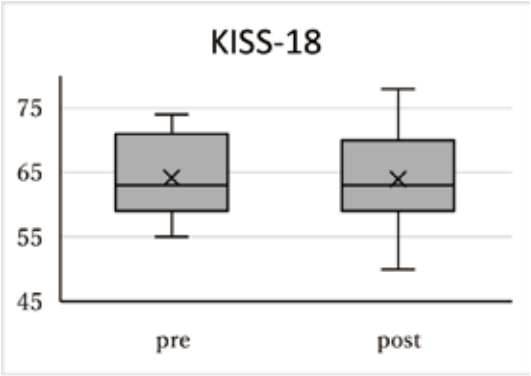

図５　KISS-18 の授業前後の変化

社会的スキルを評価する KISS-18 について、本対象者の結果は授業前より比較的高く、授業前後で有意な変化を認めなかった（図５）。各項目の結果では、「矛盾した話が伝わってきてもうまく処理できますか」「まわりの人たちが自分と違った考えをもっていても、うまくやっていけますか」等の項目で、肯定的回答者の割合が増加した。一方、「相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか」「まわりの人たちとの間で、トラブルが起きても上手に処理できますか」等の項目では、授業後に否定的回答の割合が増加した。

授業におけるファシリテーターを通し、意見や視点が異なる対象者とのコミュニケーションへの自信が向上した一方で、攻撃的な発言への対処といったより高度な社会的スキルを求められる場面においては、その困難性を自覚する者が増加したことが示された。今後、実際の臨床における円滑な多職種連携を実践していくためには、更なる社会的スキルの向上が必要であり、今回のような他学科との積極的な交流を通して、多様な考え方や批判的意見への対処経験を重ねていき、高度なコミュニケーション能力を育むことが重要と考えられる。

連携授業後のこれらの尺度評価の変化より、他学科との連携教育の一定の効果が示された。また、医療系専門職で利用される多職種連携教育に関する尺度は、歯科衛生学生の連携教育効果の評価に応用可能であることが示唆された。今後、歯科衛生学生における多様な多職種連携教育の場で、これらの尺度を用いた教育効果の検証を重ねる予定である。

成果発表：（予定を含めて口頭発表、学術雑誌など）

・2023 年度歯科衛生学会における報告、ならびに 2024 年度実施の対象データを追加し再分析後、2024 年度日本歯科衛生教育学会等にて報告を予定している。